

# 史標 72

ISSN 1345-0522

O. D. A. 「史標」 出版局  
2023 年 12 月号

"SHIHYOU" 72  
December 2023 (published 15th December 2023)  
ISSN 1345-0522

Editorial board: Yusuke MIYAO, Yuki HAYASHI  
Laboratory of Architectural History  
School of Creative Science and Engineering, Waseda University  
O. D. A. "SHIHYOU" publishing

Room 8F-10, Okubo 3-4-1, Shinjuku, Tokyo 169-8555

TEL: 03-5286-3275  
FAX: 03-3204-5486  
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

目次  
Contents

\* \* \* \* \*

太田静六による西洋建築史ノートの概要と史料価値 - 太田ノート研究 その1 pp.1-7  
Outline and Historical Value of the Notes on the History of Western Architecture by Seiroku Ota

小岩正樹研究室 M2 宮尾侑典, 菊地 彪

日本の洋風建築における階段の意匠 pp.8-13  
Staircase Design in Western-style Architecture in Japan

元小岩研究室所属 (2023年卒) 林真子, 小岩研究室 M1 石田由奈

「共食」研究の拠点 pp.14-19  
Foundations of "Co-eating" Research

小岩正樹研究室 M2 菊地 彪

\* \* \* \* \*

執筆者略歴、執筆後記 p.20  
お知らせ p.21

# 太田静六による西洋建築史ノートの概要と史料価値 -太田ノート研究 その1

Outline and Historical Value of the Notes on the History of Western Architecture by Seiroku Ota

小岩正樹研究室 M2 宮尾侑典, 菊地 彪

## 1. 前書き

寢殿造研究などに貢献した建築史学者である太田静六氏<sup>註1</sup>は、早稲田大学理工学部の卒業であり、学部時代の建築史のノートには、授業内容について詳細な記録が残されている。このノートは早稲田大学に寄贈され、現在建築史研究室によって保管されている。

講義録研究会ではこの史料を対象とし、読解と考察を進めている。2018年度研究会では伊東忠太が講義を行った、日本建築史についての記述があるノート（tab.1の③～⑤）を対象として読解と考察を進めた。考察は、伊東が関心を持っていた分野や、伊東の近代史観がどのように構成されたのかを基点に行われた。

これを踏まえ、2022年度は、田邊泰<sup>註2</sup>の講義であった西洋建築史のノート（tab.1の④、⑥）を研究対象とし、日本の建築史学最初期における、西洋建築史観がどのように構成されていったのかを考察した。本稿では、2022年度に行った、西洋建築史を対象とした読解、考察について述べる。

## 2. 講義名とノートの作成年代について

寄贈された全ノートは9冊であり、各タイトル等は以下の通りである。

tab.1 ノートタイトルと教授名

整理番号	ノートタイトル	教授名
①	東洋美術史 1 瓦の研究	會津八一
②	東洋美術史 2	會津八一
③	日本建築史 1	伊東忠太
④	西洋建築史	田邊泰教授
	日本建築史 2	伊東忠太
⑤	日本建築史 3	伊東忠太
⑥	西洋建築史	田邊泰
⑦	支那建築史	伊東忠太
⑧	朝鮮建築史	関野貞
	回教建築史	伊東忠太
	満州における漢及び高句麗時代の文化的造形	関野貞
⑨	室町、桃山	関野貞
	支那	伊東忠太

講義名のなかで「朝鮮建築史」、「回教建築史」、「満州における漢及び高句麗時代の文化的造形」、「支那建築史」については、過去の講義名についてまとめた資料（tab.2）からは確認することができなかった。しかし「回教建築史」、「支那建築史」については講義が存在していたのではなく、希望する学生が2～3人集まれば、伊東忠太が個人的に教えていた講座であったとする記述が存在している。（日本建築学会『伊藤忠太資料目録・解説』）また、「満州における漢



### 3. 本稿の対象資料

以下では、本稿の対象史料である西洋建築史ノート2冊④、⑥の書誌情報について整理する。

西洋建築史のノートは2冊に分かれており、前半が⑥田邊泰教授 / 西洋建築史、後半が④伊東忠太教授 / 日本建築史2、田邊泰教授 / 西洋建築史に含まれている。⑥は131ページ（空白頁含む）からなり、④は54ページ（空白頁を含む）からなる。また内容については、⑥が先史時代建築～古代ローマ建築、④がビザンチン建築～近代建築が含まれている。

tab.3 ⑥西洋建築史ノートの構成と内容

目次		ノート	枚数	本研究会の	備考
		記載の頁 (頁数)		ページ割	
表紙			1	1	
表紙裏			2	2	白紙
Contentment			3	3-4 左	目次
Reference books of Architecture		5	1	4 右	
第一編 建築史概論		6-8	3	5-6 左	
第二編 建築史本論		9-		6 右 -78 右	ノート2冊に及ぶ
第一章 Architecture Prehistoric		9-16	8	6 右 -10 左	
第一節	Prehistoric time	9-11	3	6 右 -7 右	
第二節	Archi of Prehistoric age	12-16	5	8 左 -10 左	
	§.1 Cave dwelling(横穴住居)、竪穴住居	12-13		8	
	§.2 megalithio structure	14		9 左	
	§.3 henge stone	15		9 右	
	§.4 lake dwelling	16		10 左	
第二章 Egypt		17-44	1	10 右 -24 左	
	Reference books	17		10 右	
第一節	概論	18-25	8	11 左 -14 右	
	§.1 geographical condition of Egypt	18		11 左 -	
	§.2 Chronology 年代記	19		11 右 -	
	§.3 Egyptian hieroglyphic	21		12 右 -	
	§.4 古代エジプトノ社会状態	23		13 右 -	
	§.5 belief of Egyptian	25		14 右 -	
第二節	Architecture of Egypt	26-43	18	15 左 -24 左	24 左は白紙
	part I old kingdom				
	§.2 tomb	26		15 左 -	
	§.3 Sphinx	29		16 右 -	
	§.4 Fureinary Temple	32		18 左 -	
	part II Middle Kingdom				
	§.6 Tomb at hassan-Beni	34		19 左 -	
	§.7 Obelisk + Pylon	35		19 右 -	
	part III New Kingdom				
	§.8 dwelling house	37		20 右 -	
	§.9 Palace	38		21 左 -	
	§.10 Temple,(Temple at Karnek,luxor, periptial ,etc.)	38		21 左 -	
	part IV				
	§.11 Ptoemie Dynasty	42		23 左 -	
	§.12 Conclusion	42		23 左 -	
第二章 Western Asia		45-65	21	24 右 -34 右	第二章は誤記か
	§.1 Geographical condition	46		25 左 -	
	§.2 History of W.A.	49		26 右 -	
	§.3 Building Material	52		28 左 -	
	§.5 Architecture of Babylonia+ Assiria	54		29 左 -	
	§.6 Details of Architectural charactor	57		30 右 -	
	§.7 Geographical 状態 of Perssia	58		31 左 -	
	§.8 civilization of Perssia	59		31 右 -	
	§.9 Architecture of Perssia	61		32 右 -	
	§.10 conclusion of Perssia Archi	64		34 左 -	34 右は白紙
第三章 Greece		66-101	42	35 左 -55 右	
	§.1 分類	67		35 右 -	
	part I Prehelenic Greece	68-76	9	36 左 -41 左	
	§.2 Prehelenic Greece	68		36 左 -	
	§.3 Archi of Prehelenic	70		38 左 -	ノート記載のページ番号 誤り
	§.4 Tomb (Tomb of Creta Island)	70		38 左 -	
	§.5 dwelling house	72		39 左 -	
	§.6 Palace of Prehelenic	74		40 左 -	
	§.7 Decoration art of Prehelenic Greece	76		41 左 -	

tab.4 ⑥西洋建築史ノートの構成と内容 (続き)

目次	ノート 記載の頁 (頁数)	枚数 (頁数)	本研究会の ページ割	備考
part II Greece Hellenic	77-99		41 右 -54 右	
Reference Books of helenic Greece	77		41 右 -	
§.8 generation of helenic Greece	78		42 左 -	
Archi of helenic	81		43 右 -	
§.9 Bldg. material construction				
§.10 Doric Order + its construction	84		45 左 -	追加ページ4枚
§.11 Ionic Oder	86		48 左 -	
§.12 Corinthian Oder	90		50 左 -	
§.13 人像柱	91		50 右 -	
§.14 Temple	92		51 左 -	
Part III Hellenistic Greece	100-101	2	55	
第四章 Roman Architecture	102-123	22	56 左 -66 右	
pro Archi from Ancient Egypt	124-125	2	67	本の内容か
(図、白紙)	126-	22	68 左 -78 右	~ 70 右まで絵、それ以降白紙
裏表紙		1	79	

tab.5 ④西洋建築史部分の構成と内容

目次	紙数 (頁)	枚数 (頁数)	本研究会の ページ割	備考
表紙	-	1	1	
表紙裏	-	2	2	白紙
Byzantin Architecture	-	2	3	またぐ
東洋建築史 建築試験問題 建二 (Byzantin Architecture の続き)	-	2	4	挟まったもの またぐ
Romanesque Architecture	-	14	11 左 -17 右	
Gothic Architecture	-	17	18 左 -26 左	
Renaissance Architecture	-	19	26 右 -35 右	
近代建築 modern Architecture	-	8	36 左 -39 右	

また当時西洋建築史の授業は第二学年（現在の学部3年相当）で行われていたことが学科配当表から明らかになっており、太田の卒業年（1935年）よりノートの記述年代は1932年であると考えられる。

また講義を行った田邊泰についてであるが、1924年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業と同時に同校助手となり、翌25年同助教授となり、西洋建築歴史の講義を行うようになった。

また内容の構成についてであるが、ノートはtab.3のように章立てられている。章は時代や地域で分かれており、各章では概ね、地理的情報→歴史、文化→建築素材→具体的建築の順に解説されている。

なおノート⑥では冒頭に目次が記載されているが、ノート④では目次が存在せず、目次は講義後に太田が独自に設けたものと考えられる。

またノートの頁枚数ではギリシャに最も多くの頁が割かれており、講師が最も注力した点であるといえる。



### 4.1 ギリシャ建築に関する授業構成の成立について

田邊泰は森田多里<sup>註3</sup>との共著で『希臘の文化と建築（上）（下）』（1923）を残しており、この図書の序文には、森口の以下のように記述されている。

「本書は田邊君に金體の草稿を作つて貰つてそれを私が原書と引き合せて訂正し加減したものであるが、圖解の作製などには田邊君の手を煩はした點が甚だ多い。尚本書の原稿は非常に印刷を急いだので、伊東、佐藤兩先生の校閲を経ないでしまつたことをお断りしておく。

一九二三年八月二日茅蝸鳴く頃

研究室にて森口多里」

このことから『希臘の文化と建築』は内容の基盤を田邊が作り、森口が最終的に修正したことが窺える。またこの図書には、以下 fig.1~4 のように多くの図や表現の類似がみられる一方で、『希臘の文化と建築(上)』の方が内容は充実していることが記述量からもわかる。このことから、講義「西洋建築史」の古代ギリシャ分野は『希臘の文化と建築』を流用している可能性があるといえる。

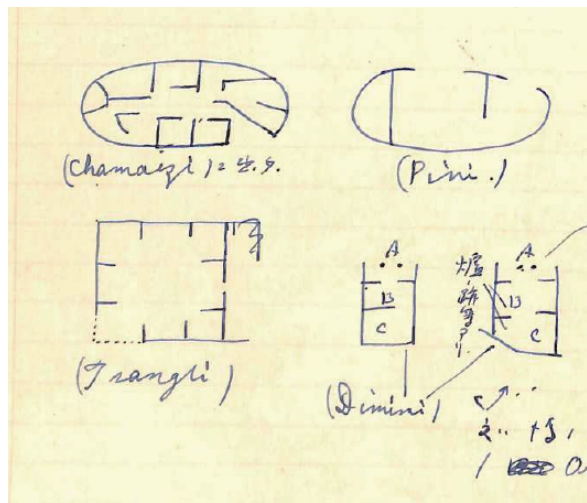


fig.1 ノート『西洋建築史』における古代ギリシャ住宅の記載

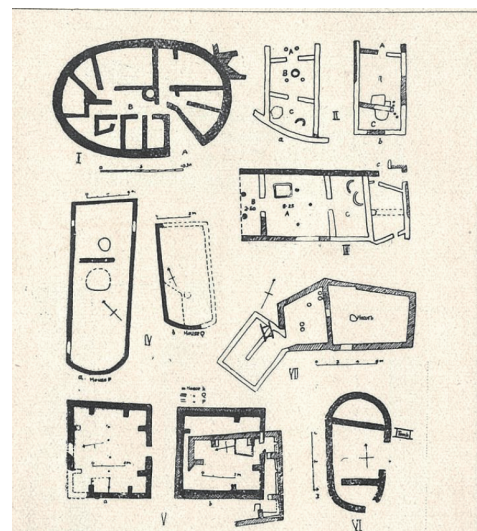


fig.2 『希臘の文化と建築』における古代ギリシャ住宅の記載

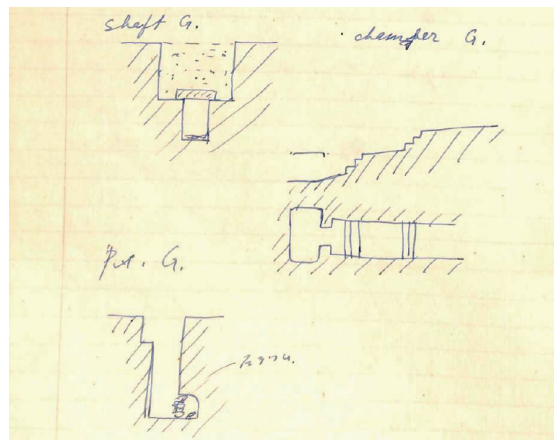


fig.3 ノート『西洋建築史』における古代ギリシャ墓所の記載

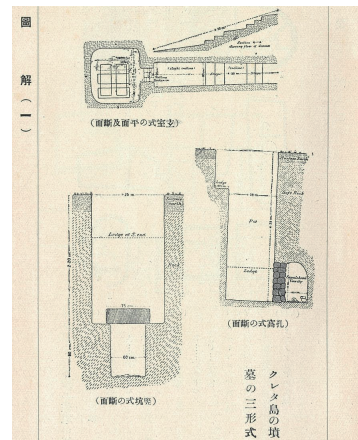


fig.4 『希臘の文化と建築』における古代ギリシャ墓所の記載



## 4.2 参考図書からわかる授業の全体構成の成立

ノート序盤では、講義で紹介されたとみられる参考図書が、講師のコメントを書き添えて記してある。tab. 6 は参考図書を読み下し整理したものである。

tab.6 参考図書リスト

タイトル	著者	備考	ノートとの比較
Architecture	W.R. Rethaby	おそらく Architecture an Introduction	○
A History of Architecture	B.Fletcher	5,6 版で大きく変更が加わっているため、改訂以前と以後でそれぞれ比較できる	○
Apollo	S.Reinch	確認できず	
A.History of Arch	F.kimboll, G.H.Egull	確認できず	
A short critical History of Architecture	Statham, Henry		○
A. History of Archr	Heathcote		○
History of Ancient Art	Hamlin		○
History of Mediaerial Art	F.Reber	古代に限定	
History of Architectural Development	F.Reber	中世に限定	
History of Architectural Development	Sinpson		○
Geschichte der Baukunst	Joseph		○
Die konstraktionen und slie kunst formen der Architekutur	C.Uhde		○
Gu ■■■■ der ku ■■■■, Ho ■■■■	K, ■■■■ ma ■■■■	不明	
Han ■ bucf ■■■■ ku ■■■■	g ■■■■ cficfisa ■■■■ A,Sg ■■■■ ug ■■■■	不明	

これらの参考図書について、授業の構成に大きく関わった図書を明らかにするため、ノートと目次構成の比較を行った。比較を行ったのは、存在が確認できるなど、参照可能な 7 冊である。なお、History of Architecture については 5 版以前と 6 版以後で大幅に内容が変わっているとされており、4 版と 16 版で比較を行った。

検証の結果、最もノートの目次構成と一致したのは B.Fletcher “History of Architecture” の大幅改定以後の版であった。History of Architecture は、構成に加えて目次タイトルも近似しており、授業を構成する上で極めて重要な図書であった可能性が高い。しかし一方で、『希臘の文化と建築』では確認できた文章や図が、“History of Architecture” では確認できず、各建築項目の内容についてはその他の資料も参考に授業を構成していったといえよう。

以上のことから、田邊泰による授業「西洋建築史」は、主に B.Fletcher の “History of Architecture” をもとに、田邊泰自身が過去に執筆した『希臘の文化と建築』の内容から増補するなどして独自の授業内容を構成していったと考えられる。

ノート目次	History of Architecture 第 16 版目次
Contentment	Introduction
Reference books of Architecture	Egyptian Architecture .
第一編 建築史概論	West Asiatic Architecture
Prehistoric	Greek Architecture
Egypt	Roman Architecture
Western Asia	Early Christian Architecture
Greece	Byzantine Architecture
Roman Architecture	Romanesque Architecture
Byzantin Architecture	Gothic Architecture
Romanesque Architecture	Renaissance Architecture
Gothic Architecture	Modern Architecture
Renaissance Architecture	Architecture of the British Dominions
modern Architecture	Architecture in the United States

fig.5 ノートと History of Architecture( 第 16 版 ) の目次構成の比較

## 5. 「西洋建築史」ノートの史料的価値

太田静六氏が記録した「西洋建築史」ノートからは、以下のことがわかる。

- ・ B.Fletcher “History of Architecture” は、田邊泰が行った授業の構成上、特に参照された図書であった可能性が高い。
- ・ 各建築項目の内容は “History of Architecture” 以外の資料から参照され、当時の授業が構成された。

太田静六氏が記録したノートは、当時の早稲田大学の建築史の講義内容を知る史料であるのみならず、当時の建築史教育における、西洋建築史観の構築過程を明らかにするものであるといえるだろう。

### 注釈

注1：ノートの著者である太田静六について

太田静六（1911-2009）は寝殿造研究などに貢献した建築史学者である。昭和10年（1935）に早稲田大学理工学部を卒業し、九州大学工学部教授、早稲田大学文学部客員教授を務めた。著書は『寝殿造の研究』（1987）が有名である。また西洋建築史にも傾倒し、『西洋建築様式史図集 同解説』（1967）『ヨーロッパの宮殿』（1999）などを記した。

注2：田邊泰

1924年早稲田大学理工学部建築学科を卒業と同時に同校助手となり、翌25年同助教授となり、西洋建築歴史の講義を行うようになる。研究者としての田邊は、伊東忠太に師事し、関西の社寺建築を主たる対象としていた昭和初期にあって、いち早く関東の社寺建築に取り組み『徳川家霊廟』『日光廟建築』などを著し関東系の建築史を大成する。ノート書誌情報また、沖縄諸島の建築、庭園を調査し、その成果をまとめた『琉球建築』は、第2次世界大戦により被害を受ける以前の琉球文化を伝えるものとして貴重である。文化財保護審議会専門委員として、浅草寺五重塔、鶴見・総持寺大祖堂、鎌倉・円覚寺本堂などの鉄筋コンクリートによる再建を担当している。西洋建築については『西洋建築史要』（1952）を記している。

注3：森口多里

森口多里（1892-1984）は1910年（明治43年）、早稲田大学文学部予科に入学。在学中、恩師佐藤功一より美術品の調査を頼まれる。森口は日本画の大家や華族、財閥、旧家などを訪問、収蔵されていた名品を堪能する。1914年（大正3年）3月、早稲田大学文学部英文科を卒業し美術評論活動に入る。当時はヨーロッパ美術の需要期にあたり、専門の美術評論家は皆無に近い状態だった。森口は『ミレー評伝』の翻訳や『恐怖のムンク』などの著書で最新のヨーロッパ美術を紹介、パリ留学後には美術史学研究も手がけた。また、日本在来の美に対しても民俗学研究や民芸運動などの形で関わっており、その活動領域は非常に幅広い。

# 日本の洋風建築における階段の意匠

Staircase Design in Western-style Architecture in Japan

林真子、石田由奈

## 研究概要

本稿は2021-22年度「室内装飾研究会」の活動をまとめたものである。

室内装飾研究会は、洋館の内部装飾に興味を持ったメンバーが始めたものである。洋館の中でも階段は特に装飾的要素の強い箇所であり、手摺の親柱には多種多様の意匠が凝らされている。当初の研究目的は、この親柱のデザインの種類や変化を調査することにより、洋館（住宅）の細部に近代化が見られるかを確認することであった。しかし研究を進めるにつれ、洋風の公共建築の親柱を見る、建築の設計者に注目するなど、範囲を広げて階段の親柱について考察を行った。

## 研究方法

階段・親柱に関する文献の調査と事例調査を並行して行い、考察した。2021年度は日本語の文献と全国の洋館の調査を、2022年度は主に外国語の文献の調査と公共建築の事例の追加を行った。

### 1. 日本と西洋の住宅における階段の役割（既往研究より）

古俣氏、内田氏<sup>1</sup>によると、江戸時代以前の日本の住宅の階段は単に上の階への移動手段であり、人目を避けた場所に急勾配な直線階段を設置するのが主流であった。一方、西洋では階段は装飾的な役割を兼ね、玄関やホールにゆるやかな折れ階段を設置するのが主流であった。『図解百科 様式の要素 英米住宅デザイン事典』（以下、デザイン事典）は様式・建築運動ごとに、住宅を構成する部分の実例を紹介している。階段の位置づけについては「地位の象徴<sup>2</sup>」「ひとつの展示品<sup>3</sup>」という記述が確認できる。さらに「階段をもはや壁の背後に隠さないようになると、親柱が室内装飾にとって当然の焦点となった<sup>4</sup>」などの記述から、階段の中でも親柱は装飾のポイントであったことが読み取れる。

### 2. 全国の洋館の親柱

研究会では主に『日本近代建築総覧』を参考に全国の洋館に問い合わせ、54件のカタログの作成を行った。一部の洋館には直接訪れ、写真を撮影した。本文では省略するが、カタログには以下の項目を記載した。

- ・建築名称 ・所在地 ・構造 ・建築の様式 ・着工年 ・竣工年 ・設計者
- ・階段の設計者 ・1階平面図 ・親柱、階段全体の写真

表1は、54件のうち親柱が存在した51件について、考察の際に作成した表の一部である。

表1 洋館の親柱について

建築名	竣工年	建築家	形状	装飾	Newel cap	装飾詳細
旧渋沢栄一邸	1876	(M9) 清水喜助	円	無	有	
旧柳沢禎三邸	1880	(M13) 不詳	四角	無	有	半分壁に埋まる
旧岩崎久彌邸	1896	(M29) ジョサイア・コンドル	四角	有	有	全体的に華美
旧山縣有朋別邸	1898	(M31) 新家孝正	四角	有	有	子柱の形状は円
旧徳川頼倫邸	1899	(M32) 石村金次郎	円	無	有	四角と円の複合型。ろくろ挽きに近い。
旧シャープ邸	1903	(M33) アレクサンダー・ネルソン・ハンセル	四角	有	有	クイーン・アン式住宅に適した形か。
旧亀岡家住宅	1904	(M37) 小笠原国太郎	円	無	有	ろくろ挽きの特徴が強い。
旧渡辺千秋邸	1905	(M38) 木子幸三郎	四角	有	有	斜め置き。彫刻以外はシンプル。
旧武藤山治邸	1907	(M40) 大熊喜邦	円	無	有	コロニアル?類似例が少ない。
旧マッケーレブ邸	1907	(M40) 不詳	円	有	有	ろくろ挽きと彫刻
旧トーマス住宅	1909	(M41) ゲオルグ・デ・ラランデ	四角	無	有	アーツアンドクラフツ
旧有栖川宮威仁邸	1908	(M41) 不詳	四角	無	有	エドワーディアン
旧鶴崎平三郎邸	1908	(M41) 野口孫市	四角	無	無	寸胴
旧村井吉兵衛別邸	1909	(M42) J.M. ガーディナー	四角	有	有(照明)	1F
旧村井吉兵衛別邸	1909	(M42) 不詳	巻き状	有	無	2F
旧内田定植・陽子邸	1910	(M43) J.M. ガーディナー	四角	無	無	アメリカン・ヴィクトリアン
旧松本健次郎邸	1910	(M43) 久保田小三郎	四角	無	無	
旧中整家住宅	1911	(M44) 鈴木禎次	四角	有	有	アメリカン・ボザールとバロックの中間。
旧丸山茂助邸	1912	(T1) 長谷川建築事務所	四角	無	有	半球のキャップ、寄木細工
旧諸戸清六邸	1913	(T2) ジョサイア・コンドル(桜井小太郎)	四角	無	有	1F: 四角の cap 2F: ろくろ挽きの cap
旧西村伊作邸	1914	(T3) 西村伊作	四角	無	無	上に向かって細くなる。
旧 J.R. ドレウェル邸	1915	(T4) 不詳	円	無	有	ろくろ挽き
旧日下部久太郎邸	1915-19	(T4-8) 不詳	四角	無	有	
旧島津忠重邸	1917	(T6) ジョサイア・コンドル	四角	無	有	ろくろ挽きに近い。
旧古河邸	1917	(T6) ジョサイア・コンドル	四角	無	有	
旧神谷伝兵衛稲毛別荘	1918	(T7) 不詳	円柱	無	有	ろくろ挽き
福澤桃介記念館(福澤桃介別荘)	1919	(T8) 不詳	四角	無	有	
旧田中家住宅 洋館	1923	(T12) 櫻井忍夫	四角	無	有	
旧松風嘉定家住宅	1921	(T10) 武田五一	四角	無	有	アーツ・アンド・クラフツ
旧佐藤安太郎・諸川庄三邸	1921	(T10) ウィリアム・メレル・ヴォーリズ	四角	無	有	
旧野口喜一郎邸	1922	(T11) 野口喜一郎	四角	無	有	半球の cap
旧谷口房蔵別邸	1923	(T12) 和田貞次郎説が有力	四角	無	有	半球の cap
旧鳩山一郎邸	1924	(T13) 岡田信一郎	巻き状	無	無	子柱の集結
旧土岐章邸	1924	(T13) 伊藤平三郎	四角	有	無	
旧朝吹常吉邸	1925	(T14) ウィリアム・メレル・ヴォーリズ	巻き状	無	有	子柱の集結、ろくろ挽きのキャップに近い。
旧山本有三邸	1926	(T15) 不詳	四角	無	無	
エリスマン邸	1926	(T15) アントニン・レーモンド	四角	無	有	
旧小笠原邸	1927	(S2) 曾禰中條建築事務所	円柱	有	有	サンタ帽に近い cap。landing newel は角柱。様式本には載っていない形。
旧岩崎彦彌太郎	1927-28	(S2-3) 不詳	四角	無	有	球型の cap
旧新田邸	1928	(S3) 木子七郎	四角	有	有	ろくろ挽きが上部と中部に二個
旧前田家本邸	1929	(S4) 高橋貞太郎/塚本靖	四角	無	有	かなりシンプルな装飾と cap
島藺家住宅	1932	(S7) 矢部又吉	円柱	無	無	
旧村田邸	1933	(S8) 大林組	円柱	無	有	巻きから親柱だけ上に飛び出す。
旧尾張徳川家本邸主屋	1934	(S9) 不詳	四角	有	有	木彫りの熊
旧三井クラブ	1936	(S11) 不詳	四角	無	有	所々削られている。子柱と形が共通して見える。
旧岩崎小弥太別邸	1936	(S11) 曾禰中條建築事務所	四角	無	有	球型の cap
旧乾新兵衛邸	1936	(S11) 渡辺節	四角	有	有	ジャコビアン様式
旧マッケンジー住宅	1936	(S11) ウィリアム・メレル・ヴォーリズ	四角	無	有	
英国総領事公邸	1937	(S12) 不詳	巻き状	無	有	
旧新津恒吉邸	1938	(S13) 大友弘	四角	有	有	複雑な柄
旧渋沢信雄邸	1938	(S13) 佐藤秀三	六角形	無	無	



## 2-1. デザインの傾向

『デザイン事典』の各章の階段の項目を参考にして、各洋館の親柱はどの様式に近いのか、或いは日本独特の形であるか分類を行った。特に複数の洋館で見られたのが、コロニアルや後期ジョージアンにみられる「手摺子巻き状タイプ」と、英米では時代を問わず見られる「ロクロ挽き+彫刻タイプ」であった。他にもデザイン事典にのっている絵や写真に似たものも多く見られた。親柱頂部につけられた装飾（図2の丸で囲った部分）は Newel cap と呼ばれる。この Newel cap がついた親柱は洋館に多くみられ、ついていないものは「手摺子巻き状タイプ」か寸胴の簡素なものに大別された。

時代や地域によるデザインの傾向は見られなかったことから、明治～昭和の洋館を建てた建築家たちは既に西洋の親柱を知っていたと考えられる。なお、親柱を輸入した可能性も否定できないが、輸入があったと明確に分かるものは確認できていない。



図1 「手摺子巻き状タイプ」の図と旧鳩山邸 (1924) の親柱

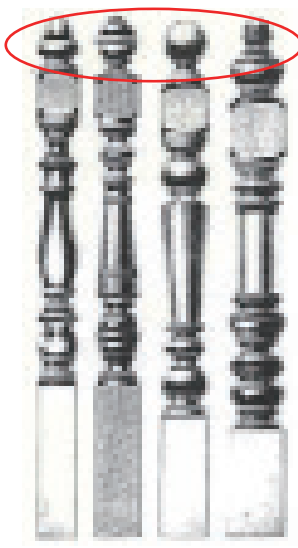


図2 「ロクロ挽き+彫刻タイプ」の図と旧新田邸 (1928) の親柱

## 2-2. 建築様式との比較

次に、階段の様式について、建築様式と一致しているか確認した。ガーディナー設計の旧内田邸 (1910) はアメリカン・ヴィクトリアン、大熊喜邦設計の旧武藤邸 (1907) はコロニアル様式で一致している。



図3 旧内田邸 外観



図4 旧内田邸 階段

また、様式の一致とは言えないものの、周りとは調和しているものがいくつかある。例えば、旧中埜家住宅 (1911) では階段の明確な様式は不明であるが、階段と建築内部の素材や色味に統一感がある。旧渋谷信雄邸 (1938) では階段も含め家全体に栗材が使われており、直線的なデザインも全体で共通している。

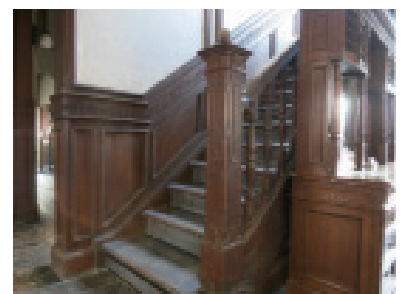


図5 旧中埜家住宅 階段まわり



階段の様式が明確に分からないものは多くみられ、西洋人建築家や大学で建築を学んだ日本人建築家にもその傾向がみられる。様式を判断できなかったものには、①『デザイン事典』の複数の様式の章に似たものがみられたもの、②『デザイン事典』に似たものが見つからない装飾がされたものがあった。①について、前述の旧中埜家住宅の親柱はアメリカン・ボザールとバロックの章に似た親柱がみられた。②の例として、旧村井吉兵衛別邸の1階の階段があげられる。2階は「手摺子巻き状タイプ」であるが、手摺子自体にも彫刻されている点で、コロニアルに多く見られるものよりも装飾が凝っている。

階段の親柱には、各様式の典型的なもののみでなく、デザイナーによるオリジナルの装飾が強いものが存在するため、様式の判断が困難なのだと思う。それほど建築の中でも装飾的な役割が強かった、とも考えられる。

### 2-3. 階段の位置と役割

装飾的な役割の有無を考察するため、階段の位置について分析を行った。親柱があり階段の位置が分かる48件のうち、玄関ホール・広間などの目立つ位置に階段が存在するものは41件であった。他の場所に階段が存在する7件について、洋館全体が和洋折衷のものが3件、蔵の階段が1件、2階が増築されたものが1件あった。以上より確かに日本の洋館においても階段が目立つ位置にあるものは多く、西洋と同様に装飾の役割を持っていたと分かる。



図6 旧前田家本邸洋館 階段位置

### 3. 公共建築の親柱

住宅以外の用途の建築の階段親柱についても、いくつかの事例を確認した。主に洋風の学校・庁舎と擬洋風建築について、親柱のデザインを見た。

#### 3-1. 洋風の学校・庁舎

学校の階段で確認できる親柱は、直線的でシンプルなデザインのものが多く確認された。水平断面も多くが四角形であった。この特徴は、エントランスの人目に付く部分にも見られた。

庁舎では、エントランスなど外部の人の目が集まる部分に配置された階段の親柱に関しては、豪華な装飾を持つものや巻き状のものが数多く確認できた。2-3 での洋館の指摘と同様に、庁舎においても、階段が装飾の役割を持っていたと捉えることができる。

建築の用途によって装飾要素の強さが異なる傾向がみられた。庁舎のほうが学校よりも、より来客を意識していたと推測する。



図7 旧滝部小学校本館(1924)1階親柱



図8 旧滝部小学校本館外観

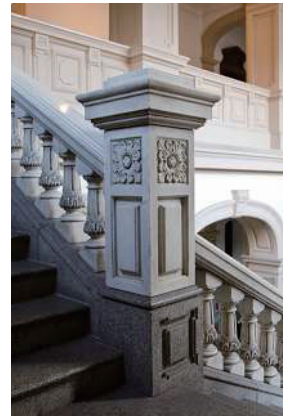


図9 京都府庁旧本館(1904)親柱

#### 3-2. 擬洋風建築

また、明治初期の役所や議事堂、学校の中には擬洋風建築が多数存在する。擬洋風建築とは、幕末から明治初期にかけて、主に近世以来の技術を身につけた大工棟梁によって設計・施工された建築であり、日本の木造建築と西洋の建築の要素が混合されたものである。

擬洋風の公共建築の親柱には、下部 (Newel post) が八角柱のものが複数みられた。これは洋館および純洋風の公共建築では確認できなかった特徴である。日本では丸柱を作る際、一度八角柱を削りだした後に角を削っていた。擬洋風建築において、あえて丸く削らないことで新しさ (≒洋風) を表現した可能性がある。また、擬洋風建築には多角形平面の塔を持つものが複数あり、その背後には規矩術があったとの指摘<sup>5</sup>もされている。八角柱は、元々日本にあった技術から見出された新しいものではないかと考えられる。

また、擬洋風の親柱には、洋館と比べて Newel cap が擬宝珠に似ているものが複数みられる。<sup>6</sup>

擬洋風建築の親柱に複数みられた特徴が、洋館および純洋風の公共建築ではあまりみられないことも、建築家たちの西洋建築の親柱デザインへの理解を示すと考えられる。



図10 旧鶴岡警察署庁舎(1884)1階親柱

## まとめ

明治～昭和の日本の洋館において、多くの階段及びその親柱は西洋の住宅と同様に、装飾の役割を意識してつくられていた。また、親柱には（様式は明確に分からなかいものの）西洋によく見られるデザインが複数存在することがわかった。時代や地域、設計者の経歴による傾向は見られなかった。これらのことは、明治時代には既に、洋館の設計者の間に、西洋建築内部・細部の理解が広まっていたことを示すと考えられる。

公共の洋風建築の階段に目を向けてみると、庁舎のエントランスには親柱が豪華な階段が複数確認でき、階段の装飾としての役割が読み取れた。一方で学校の階段ではシンプルな親柱が多く見られたことから、建築用途によって装飾要素の強さは異なると考えられた。棟梁設計の擬洋風建築の親柱には、八角柱の Newel post や擬宝珠に似た Newel cap が複数みられた。これらの特徴が洋館および純洋風の公共建築で確認できなかったこともまた、建築家たちが西洋の階段親柱のデザインを知っていたことを表すと考えられる。

本研究の当初に目的とした、階段の親柱を通して細部の「近代化（＝変化）を見る」ことはできなかった。しかし、日本国内においても、明治期から装飾としての階段・親柱に注意が払われ、デザイン自体も早い段階で西洋のものが知られていたことが確認できた。

### < 注釈 >

注 1…古俣和将、内田 青蔵 「「階段」から見たわが国戦前期の住宅の変遷に関する一考察 - 戦前期に刊行された住宅関連書籍を主史料として -」 日本建築学会大会学術講演梗概集（2014）

注 2…スティーブン・キャロウェー 『図解百科 様式の要素 英米住宅デザイン事典』 同朋社（1994） p.35

注 3…同上 p.126

注 4…同上 p.128

注 5…中谷礼仁 「様式的自由と擬洋風建築」 『シリーズ都市・建築・歴史8 近代化の波及』 東京大学出版会（2006）

注 6…擬洋風建築の親柱については、林真子 『擬洋風建築の内部意匠』（2022 年度早稲田大学建築史系修士論文） 参考

### < 図版典拠 >

図 1（左）…スティーブン・キャロウェー 『図解百科 様式の要素 英米住宅デザイン事典』 同朋社（1994） p.160

図 1（右）…筆者撮影

図 2（左）…スティーブン・キャロウェー 『図解百科 様式の要素 英米住宅デザイン事典』 同朋社（1994） p.376

図 2（右）…文 藤森照信 / 写真 増田彰久 『歴史遺産 日本の洋館 < 第 5 巻 > 昭和篇 (1)』 講談社（2003） p.87

図 3…文 藤森照信 / 写真 増田彰久 『歴史遺産 日本の洋館 < 第 2 巻 > 明治篇 (2)』 講談社（2002） p.101

図 4…同上 p.102

図 5…半田市立博物館提供

図 6…文化財建造物保存技術協会 『重要文化財旧前田家本邸洋館ほか一棟保存修理工事報告書』 東京都教育委員会（地域教育支援部）（2019） p.112

図 7…文化財建造物保存技術協会 『旧滝部小学校本館（下関市立豊北歴史民俗資料館）保存修理工事報告書』 下関市教育委員会（2012） p.4

図 8…同上 p.3

図 9…府庁旧本館利活用応援ネット 『重要文化財京都府庁旧本館』（2009） p.31

図 10…筆者撮影

表 1…筆者作成

## 「共食」研究の拠点

### Foundations of “Co-eating” Research

小岩正樹研究室 M2 菊地 彪

#### 1. はじめに

「共食」とはあまり馴染みのない単語であろう。辞書には、狭義としての「①神への供え物を皆で食べることによって、神と人または人と人の結合を強めようとする儀礼的な食事」と、広義の「②複数人でたべること。個食に対して」が記載されている。②は昨今の社会問題視として、広く使われるようになった。ちなみに①は、民俗学などで元来使われた「神人共食」が由来である。

今回は、建築史の今後課題としなければならない、また現在にもなお普遍的な問題として存在しうる「②複数人でたべること」の意味としての広義の「共食」を扱う。

ここでなぜ建築史が共食を扱わなければならないのか、という疑問に対しては、建築史の射程がどこまでか、という議論にも繋がるため、ここでは簡潔に個人的な意見を載せるに留める。建築は何のためにあるのか、何にあるのか、という問題を考えた際、生活とは何か、人間とは如何なるものか、という問いに通底する。そこで生活の一部である食は、建築史として当然ながら扱うべき対象であると考ええる。

現代でもなお重要な建築の問題であることが、先日私が体験したことからも窺うことができる。私が友人と牛丼チェーン店に行った時の話である。コロナ禍だったこともあり、一つのテーブルが、パーテーションによって二つに区切られていたのである。店側の意図としては、一つの机で二組が座れるように設定したのである。私とその席に座ろうとすると、友人が「人がいるのに座るの？」と、絶対ありえないと言わんばかりの口調で聞いてきたのだ。誰か知らない人と食べない、つまり共食することを拒否したのである。このことから分かるように、誰かが食べる空間をどう区切るのか、どこまでが許容されるのか、という空間の問題として扱うことができるのである。

以上から、建築史の対象としても「共食」を捉える必要がある。

#### 2. 既往研究からみる「共食」とは

次に「共食」とは何か、既往研究を踏まえ論じつつ、その課題について述べる。

まず共食の発生については、

- ・共同体を維持する中で、互いの紐帯を強める目的として「共食」がある（原田<sup>1)</sup>
- ・共同生活、共同作業の中で生まれるもの（澤田<sup>2)</sup>

他にも「共食」の要素として「時間・場所・料理」を共有（原田）をあげたり、「共食」を、コミュニケー



ションの非言語的手段（小池<sup>3</sup>）として位置付けるものもある。

以上のように、生きていく中での「共食」を考察したものが散見される。

日本の「共食観」ともいうべき点からは、江原氏<sup>4</sup>の近代家族を対象として「家族が揃わない食事でも、共に繋がっている心が重視されている」と考察されている点や、仏壇の供物や、神・仏との食事を想像するに、精神的なものとしての「共食」があることが窺える。

ここからは、実態を伴わない「共食」の存在が確認できる。

私は以上の先学から、自身の卒業論文<sup>5</sup>の基盤として、研究対象である江戸時代において抽出されるであろう「共食」の性格を以下の4点挙げた。

- ①複数人（人と人、人ならざる者）との関係で成り立つ
- ②飲食行為を通じて相互間の紐帯が強まる
- ③元からの相互間の精神的な強さ（紐帯）に拘わらず、飲食行為として共有するものにより、性格の強弱が異なる
- ④共同体によって様々に形態や意味が変容する

以上のように整理されるが、この4点は単に表層的な定義に留まっており、このままでは普遍的問題としての「共食」は扱うことができない。そのため、さらに一段とその内実に向き合わなければならないのである。

石毛氏<sup>6</sup>は人間の食行動について二つのテーゼ、「人間は料理をする動物である」「人間は共食する動物である」を提起している。しかし今なおこれについて体系的に論じられたものはないと考える。というのも、結果的現象に捉われ、その根源からの分析がなされていないからである。というのも「共食」が普遍的現象であることが、前提として位置付けられていることによるものとする。現代社会で当たり前にも一人でも食事ができる現象をも捉えなければならない、からである。

つまり「共食」は単なる現象であり、その内実、本質的なものに普遍性を見出さなければならない。

私は「共食」の核の部分にあるのは「精神」であるとする。コミュニケーションや、共に食べる人が存在しようがしまいが、「誰かと食べる / 食べない」という意識が、「共食」に深く関わっている点から、そう考える。

順番は前後するが、以下に本論考の目的を述べる。

共食は心的な問題に帰結するため、共食を効率や対価のためであるという、合理的考察からの離脱をしなければならない。また食文化を食としての問題のみにするのではなく、共同観念（共同体論）、建築・空間（建築史論）といった多角的に関連し合う問題として、議論の俎上に載せたいのである。

建築史としては、意識が表出する空間として、この課題に取り組みなければならないのである。



### 3. 「共食」の変遷史論

「共食」とは何かを一概に語ることは難しく、なおもまた自らの中でも結論づいていない。しかし、「共食」の変遷史を想像を交えながらではあるが論じることで、「共食」研究の基礎としたい。

#### ■ 「共食」の起源

まず、「共食」の起源について、文化普遍としての変遷に習い論じる。

先に述べた心的問題であるとするればその起源は、食事は一人で食べるより複数人で食べた方が楽しい、心地が良い、といった感覚的快樂によって「共食」が行われるようになったと推測される。裏を返せば、情報共有や食べ物を分け合うためにといった合理的理由によって「共食」がなされている訳ではない、ということである。最初の自己内部に起こる快樂による事象発生としての「共食」を「初源的共食（第Ⅰ期共食）」と定義づける。

しかしながら時代を経ると、合理的理由による二次的利点が、やがてそれらを主目的として、「共食」がされるようになる、という変遷が想像される。つまり対社会的要素が含まれていくようになると言える。

「初源的共食」が「共食」における本質となる。そしてまたどの時代においても「共食」の事象に対して、この本質を抽出することが重要な意義になる。例えば、同じ食べ物を共有することや、生命維持としての食事を共にすることによる精神的内面への影響などが、本質が表出する感覚である。

#### ■ 「共食」の展開

次なる論点は、そのように発生した「共食」が時代を経ることで、どのような展開がなされているかである。前述した起源については、想像でしか語ることができないが、原始社会以降、現代までは断片的な資料と既往研究により、「共食」の展開を抽出できるのではないかと考える。

以降は社会と関連する共食を捉えるために共同体との関連させ、日本を対象として「共食」の展開を試みる。

まず、狩猟採集民族について述べる。前古代ではすでに、おそらく合理的理由で「共食」がなされていたのではないかと考える。というのは、「共食」をしないことに対する畏怖のような共同観念が発達していたと考える。何のための共同観念かという、誰かが見ていないところで、食事を確保していないかなど、そのようなことを禁ずる理由が想像される。

つまりこの段階で、共食することに何かしらの意味を見出すことができるようになったと言える。このような展開は、自然宗教から原始宗教の始まりと関連していると考えられる。

この共食を「初源的共食」とは別に「前古代的共食（第Ⅱ期共食）」または「狩猟採集的共食（第Ⅱ期共食）」と定義づけられるのではないかと考える。

ただしここで留意しなければならないこととして、「初源的共食」は主に植物採集の時代が想像され、そこ

から火の獲得、肉食文化の形成など、数々の食文化水準の確率が存在し、単に「初源的共食」→「狩猟採集的共食」とは言い切れないのである。

次に農耕社会について述べる。この時代に見られる共食の特徴として農耕祭儀が挙げられる。農耕祭儀にも様々な段階があるが、本稿で取り扱うのは、高度に展開した大嘗祭である。大嘗祭では神との共食がなされる。このことは、「共食」がより抽象的、観念的な水準まで押し上げられていることを意味する。

さらに、この時代の「共食」は「同一」になる性質が表出したと言っても良い。神と同一になれることや、一揆を起こす際に仲間の印として共飲を行った事例からも、「同心」の意味合いが表出していることが窺える。

この時代の「共食」の段階を「第Ⅲ期共食」と定義づける。

この抽象的な共食は神との共食、仏教的な共食、先祖供養としてのお供えものなどに展開される、共食相手が存在しなくとも、意識的、観念的な共食が可能になったことを意味する。

ここで話の筋とは異なるが、肉食禁止令について触れる。

肉食禁止令は、天武天皇が天武4年(675)に肉食を禁止する詔を公布したが、これは仏教による影響と言われている。また、吉本氏<sup>7</sup>は「宗教が〈宗教〉と〈法〉に分裂するのは、共同体が血縁関係の水準をいささかでも離脱した時である」と言及している。

ここで想像を膨らませれば、肉食禁止令から、仏教的な規律が国家の法令となるこの過程は、食事においても、血縁集団の共同観念が、非血縁集団の共同観念へと転化した展開を描くことができる。つまり、日本における共同観念が食にも表れた、または食にも及んだ現象として理解される。この意味からも、共食と共同体、共同観念としての心的問題を結びつける意味が窺えるであろう。

食事が穢れを意識するようになり、お盆を個人々人別にする食文化が形成されるなど、その食事実態が心的なものに影響を与えていたことは想像に難くない。

ここで原田氏が提唱した共食の三要素「時間・料理・場所」を、共食の変遷に当てはめてみる。

狩猟採集時代では、時間・料理・場所の共食の要素のうち、狩猟した動物を皆で食べるという点から、「料理」が共食に揺さぶりを与えているのではないかと考える。

農耕をするようになると、食糧の誕生から死(食事)までをみることになり、時間の概念に縛られるようになる。それ以外にも、種の植え付けから狩る作業まで、皆で分担して作業することになり、皆で一から育てたものを、皆で食べることによる「共食」が想像される。時間・料理・場所の「料理」に加え、「時間」も共食に揺さぶりを与えているのではないかと考える。

貴族や武士などに見られる共食は、一緒に食べる、食べないかで、仲間か否か、又は食事する位置によって序列などを表すようになる。時間・料理・場所の「料理」「時間」に加え、「場所」が共食に揺さぶりを与えているのではないかと考える。

このように、単に「時間・料理・場所」を共有するのが共食の要素であるとしても、共食の概念・観念に対して時間差によって揺さぶられているのではないかと想像する。これは心的次元における時間・空間の把握に関連する問題であると考える。

ただし、このような安易に描ける展開において、狩猟採集時代では、時間・場所が共食に対しての影響がなかった訳ではない。また「揺さぶり」という表現については、共食の心的次元に対する進展であると予想する。

また、共食の展開は、「時間・料理・場所」が観念化され、抽象化されるため、実態としての意味はなさなくなる。つまりその要素を心的問題としてさらに分析する必要がある。

以上が「第Ⅱ・Ⅲ期共食」であるが、このようにまだ多くの課題が残されている。

時代が降り江戸時代に入ると、外食文化が形成されるようになる。江戸では、地方の人の流入により飲食店が栄え、それと同時に一人で食事することが可能になった時代であると言える。外食で見知らぬ人との共食、鍋文化の勃興や、穢れの薄れ、見知らぬ人と共同生活をするようになった生活背景も含め、江戸時代はそれ以前と異なる食文化を形成していることが窺える。つまり、江戸時代は食文化としてだけではなく、共食、並びに共同観念においても変革があった時代である。

江戸時代以前では、コミュニティ内での食事、共食がほとんどであったのに対し、江戸時代では一人で食べるという選択肢を持つようになった。それまで「共食」に対する意識としては「誰かと食べる / 食べない」に意味が見出されていた。「誰かと食べる」ことを前提として、相対的に「誰かと食べない」事象が存在していたと言える。それに対し、江戸時代では、「誰かと食べる / 誰かと食べない / 一人で食べる / 一人で食べない」という複雑な軸が生じたといえる。つまり「共食」の文化水準が展開したと言える。

この時代における共食を「第Ⅳ期共食」と定義づけられると考えられる。

続く明治時代、大正時代では、その時代の一事例ではあるが、家族の食事の場がしつけの時間であったことが窺える。そこからは必ずしも共食が楽しいものではないことが分かる。このように共同観念が食事の場にも及んでいたのに対し、現代では食事の場に社会的な強い共同観念が持ち込まれなくなったように思われる。その意味から現代における共食を「第Ⅴ期共食」と定義づけられると仮説を立てる。

まだまだ共食に対する考察が不十分であるが、以上のように、原始社会、中世、近世、近代、現代において「共食」を一直線で考えるのではなく、多元的に扱う必要性を示せたのではないかと思う。また、先の定義③で述べた通り、共食の性格ともいべきものは、グラデーショナルに展開されると考える。それは心的に共鳴し合えるか、という問題とも深く関わる問題でもある。

#### 4. 共食研究の課題

「共食」とは現象である。その根底には心的問題が存在する。誰かと実際に食べる、または誰かを想像したりするため、対人的事象、つまりある種の共同体としての問題でもあることが窺える。

「共食」とは何かと言えば、誰かと意識しながら共に食べることであり、それが時代によっては、心的展開として、共同体と関連した個々別々の意味合いを含んだ現象である。コミュニケーションとしての性質は共食の核として存在するかもしれないが、時代によって、それがどんな意味を持つのかは異なるということである。今挙げた、共食の核として位置付けたコミュニケーションの性質であるが、コミュニケーションが核ではなく、その性質、本質的な心的なものが共食の核であることに留意しなければならない。

建築史としてはコミュニティ論や空間認識論などに展開されることが想像される。

本稿の総括としては、「共食」研究は従来の合理的理由を根源として一元的ではなく、根底に心的問題の影があることを前提として、多元的に論じなければならないのである。

#### 5. おわりに

私は「共食空間」をテーマに卒業論文を執筆した。しかし「共食とは何か」と問われれば、今現在もなおその問いに対する答えは難しいと感じている。本来であれば、卒業論文でその問いに対する一考察を述べる事ができればと期待したが、当時の私にとってはそこまで手が届かなかった。そこで、論文執筆の際に集めた既往研究の整理の意味も兼ねて、今後「共食研究」の基盤となればとの思いから、書き記したのが本稿である。

本稿は、妄想の要素を多分に含みながら筆を進めたことは、私の稚拙さによるものである。批判を受けながら、修正していくことを今後の課題としたい。

#### 注釈

1. 原田信夫『「共食」の社会史』, 藤原書店, 2020
2. 澤田真人「共食の平和力」, 『vesta』, 味の素食文化センター, 100, 2015, pp.18-21
3. 小池千里「インターアクションにおける共食文化と言語」, 『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター年報』, 10, 2014, pp.239-245
4. 江原絢子「近代家庭からみた共食一食のコミュニケーション」, 『vesta』, 味の素食文化センター, 100, 2015, pp.46-49
5. 菊地彪「江戸時代下層階級にみる外食における共食実態—居酒屋を中心として—」, 早稲田大学卒業論文, 2021
6. 石毛直道『石毛直道 食文化を語る』, ドメス出版, 2009
7. 吉本隆明『改訂新版 共同幻想論』, KADOKAWA, 2020

#### その他参考文献

- 福田育弘『ともにたべるといふこと』, 教育評論社, 2021
- 梶木剛「祭り・共同祈願・共食」, 『建築雑誌』, 1301, 1990, pp.16-17
- 山極壽一『「サル化」する人間社会』, 集英社, 2014

後記・執筆者略歴

Postscript

\* \* \* \* \*

★講義録研究会は多くの方々の協力によって成り立っている研究会です。今一度、史料を寄贈して下さった太田静六氏のご家族の方々、また大和様はじめ講義録研究会を拓いて下さった方々に厚く御礼申し上げます。

宮尾侑典

1999年生まれ / 2022年早稲田大学創造理工学部建築学科卒 / 2022年4月から早稲田大学院創造理工学研究科建築学専攻入学

★『史標』の原稿を書くために、数ヶ月ぶりに研究会の資料を見直しました。改めて純粋に、階段親柱の美しさと面白さを感じました。一緒に執筆してくれた石田由奈さん、研究会を共に進めてくれた田中茉優子さん、浅野沙羅さん、岩橋明梨さん、ありがとうございました。

林真子

1998年生まれ / 2021年3月早稲田大学創造理工学部建築学科卒 / 2023年3月同大学院創造理工学研究科建築学専攻修了 / 2023年4月より公益財団法人文化財建造物保存技術協会在籍 / 修士論文「擬洋風建築の内部意匠」

石田由奈

2000年生まれ / 2023年3月早稲田大学創造理工学部建築学科卒 / 2023年4月から同大学院創造理工学研究科建築学専攻入学

★共食の持つ魅惑もまた、対幻想が共同幻想へと転化する契機の一端を担っていたのではないだろうか。(幻想については、『共同幻想論』を参照されたい。)

菊地彪

1999年生まれ / 2022年早稲田大学創造理工学部建築学科卒 / 2022年4月から早稲田大学院創造理工学研究科建築学専攻入学 / 卒論テーマ「江戸時代下層階級にみる外食における共食実態—居酒屋を中心として—」



お知らせ  
Submission

○「史標」原稿募集規定

本誌への投稿を歓迎いたします。論文、報告、書評、人物紹介、随筆等、内容は自由。建築学以外の論考に関するも可。以下の連絡先までご連絡いただければ、フォーマットテンプレートをお送りいたします。原則として、偶数ページにおさめることとし、図版には典拠、キャプションを付加してください。また、執筆後記(210文字以内)、略歴(124文字以内)のご送付もお願いいたします。

○質疑・討論原稿募集規定

掲載原稿に対する質疑や、討論の申し込みも受け付けております。ページ数は自由で、その他の原稿の形式に関しては上記のものと同一で構いません。提出期限は随時。多数のご質問・ご批評をお待ちしております。

○お問い合わせ

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1  
早稲田大学西早稲田キャンパス 55N 号館 8階 10号室  
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局  
TEL: 03-5286-3275  
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

「史標」第72号

2023年12月号(2023年12月15日発行)

編集: 宮尾侑典、林優希

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1  
早稲田大学西早稲田キャンパス 55N 号館 8階 10号室  
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局  
TEL: 03-5286-3275  
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

「史標」第72号（2023年12月号） O.D.A.「史標」出版局発行